

## Y6-02

### 東日本大震災救護活動において理学療法士に出来たこと

神戸赤十字病院 リハビリテーション科  
たかもと こうじ  
 高本 浩路

【はじめに】東日本大震災において、兵庫県支部神戸赤十字病院救護班第1班、第12班に主事として参加し、避難所内にて理学療法士としての知識、経験を生かし活動出来たことをここに報告する。

【経緯1】初動班1班主事として3月11日～15日まで出動する。13名の班員とともに岩手県釜石市鈴子町内の鈴子広場にてdERUを展開し救護活動を開始した。同時に避難所の巡回診療も開始した。

【経緯2】第12班主事として13名の班員とともに4月18日～22日まで出動する。岩手県山田町内の県立山田高校にて救護活動を前班より引継ぎ、救護所と避難所にて診療開始した。

【活動内容】初動班1班出動時は主事としての活動を行いながら、巡回診療前にスタッフにエコノミー症候群の予防体操を指導、避難所では被災者にエコノミー症候群の予防（体操を含む）飲水等と呼びかけ、特に車中にて避難する方に注意喚起を行った。第12班出動時は主事4名で参加し、大半を理学療法士として活動した。前班の理学療法士から被災者の体操指導、歩行訓練等を引き継ぎ、同班の整形外科医師と巡回診療にも同行し、新たに理学療法の必要な被災者を抽出し対応した。また、避難所内で行われていた集団体操も継続して行った。

【まとめ】救護班員、DMAT隊員として救護訓練、技能研修等に参加し、主事としての技量を挙げてきた。しかし、理学療法士としては専門知識を生かすことが出来ず物足りなさを抱きながらの赤十字救護班員であった。ただ今回の大震災において、超急性期から中期の救護活動を通して理学療法士の知識・経験を生かすことが出来たことは、地震・津波による災害医療における避難所内でのリハビリテーションの必要性を立証出来たのではないだろうか。

## Y6-03

### 石巻赤十字病院への支援活動報告 —第12班 助産師の立場から—

姫路赤十字病院 看護部<sup>1)</sup>、  
 北見赤十字病院<sup>2)</sup>、  
 大森赤十字病院<sup>3)</sup>、  
 諏訪赤十字病院<sup>4)</sup>、  
 水戸赤十字病院<sup>5)</sup>、  
 広島原爆・赤十字病院<sup>6)</sup>、  
 徳島赤十字病院<sup>7)</sup>  
しまだ ゆうこ  
 嶋田有生子<sup>1)</sup>、澤野留美子<sup>2)</sup>、櫻井 有美<sup>3)</sup>、  
 香坂 秀子<sup>4)</sup>、寺門きよえ<sup>5)</sup>、田中 真起<sup>6)</sup>、  
 鳴瀬いずみ<sup>7)</sup>

【はじめに】東日本大震災救護活動の一環として石巻赤十字病院助産センターへ助産師7名が派遣された（第12班病院支援）。前班からの申し送りも1時間という短い時間であり、施設・物品も異なる中ではじめて顔をあわせるメンバーで業務を行うことに戸惑いを感じつつも、円滑に支援を行い母児の安全を確保できるべく従事した。その活動及び今後の課題について報告する。

【派遣期間】平成23年5月9日8：30本社出発～同14日夜中着

【活動内容】石巻へ到着後10日の深夜勤務から業務支援を開始した。夜勤2名、日勤3名でシフトを組み、主に助産ケアに従事した。日勤1名が外来の妊婦保健指導にあたった。産婦が少ない場合は褥婦の授乳指導、NICUでのミルク介助、切迫早産妊婦のケア、他病棟の清潔ケアを行った。

【考察】経験年数も7年目以上であり助産診断は確実に出来るものの、自施設との業務の違いを把握することに時間がかかった。物品や器具類の違いには戸惑いながらも適応できたが、正常経過でない場合の方針・対応はどうか、医師への報告内容・時期などに困惑した。臨機応変に対応すべく努力したが、ケア方法などを現地スタッフにひとつひとつ確認せざるをえないこともあり、その作業に時間を要した。避難生活を送られている妊婦に対して平常時の外来妊婦指導では対応しきれないことも実感した。

【今後の課題】3～4日目より業務にも慣れてきたので実働5日間は短かく、もう少し長い期間ほうがより有効に支援できたと思われる。申し送りには限界があり前班と半日～1日でも重複する期間があればスムーズに業務につけたと考える。